

展示国宝一覧

○ 大図（気賀街道：愛知県豊橋市～豊川市～静岡県浜松市）

「気賀街道〈自浜松／至長楽村〉首」

国宝：地図・絵図類 番号 83、文化6年、縮尺 36,000 分の 1、66.5×81Cm

「気賀街道〈自長楽村／至御油〉尾」

国宝：地図・絵図類 番号 84、文化6年、縮尺 36,000 分の 1、67×81Cm

伊能忠敬は文化6年1月18日第6次測量から帰着し、7月25日第6次測量結果の地図を上呈した。小図1、中図1、大図22枚であったとのことであるが、現存するのは伊能忠敬記念館の気賀街道の2枚と、河内～大和、大和～伊勢の同じものが2セットの合計6枚である。

この2舗は第6次四国測量の往路、文化5年2月6日に浜松城下を出立してから、14日の御油宿（愛知県豊橋市）で東海道に合流するまでの、浜名湖北側を迂回する気賀街道（本坂通、姫街道）の測量結果だけを反映した大図である。そのため気賀街道の測線のみであり、第5次測量の往路で測量したはずの浜名湖は全く描かれていない。浜松や御油で接続する東海道も描かれていない。またコンパスローズもなく他図と接続することも想定していない大図である。地図合印（記号）や天測地点の☆印もない。地図のサイズも通常の大図に較べてかなり小ぶりである。

浜松城下（アメリカ大図にはないが、この地図には「旅籠町測所」「大手」の文字や大手門が描かれている）から北上して三方ヶ原で留印杭を残し、三十町ばかりも逆行する形で上島村に止宿している。このような行き止まりで測量精度に意味のない測線には有名な寺社や城下があることが多い。しかし『測量日記』には「曹洞宗延命寺、止宿悪し」とだけあり、参詣目的とも思えない。気賀街道の起点の一つである安間村まで測量し、測線を東海道に繋げる計画があったのであろうか。

三方ヶ原からの安間街道は浜名湖の今切が通行できない場合の街道であるため「道巾大に広し」と『測量日記』に記している。上島村への街道も浜松への街道も立派な並木が描かれている。



アメリカ大図第 111 号（遠参）

○ 大図（静岡県：大井川・御前崎）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第六〈自石部／至成行〉」

国宝：地図・絵図類 番号 20、文化元年、縮尺 36,000 分の 1、84×167Cm

享和3年3月15日に石部村（静岡市）を出立してから3月20日に成行村（静岡県掛川市）に到着するまでの第四次測量の成果である。休泊触に「海辺浪打際通測量」とあるように、東海道は測量していないので、駿河湾～遠州灘の海岸線だけが描かれている。大図の外に

「自石部 南二尺七寸一分五厘 至成行 西二尺三寸四分九厘」と墨書され、大図の測線の末端同士などの位置関係が記録されている。

『測量日記』には大井川東岸の吉永村について「此辺去る戊年（前年の享和2壬戌年）大井川大水大破損川成」とある。「川成」とは、田畑が洪水により河原となって耕作放棄された土地となることである。国会大図は大井川も小綺麗な色彩であるが、展示の大図の大井川の色調はより暗く、川筋の表現も不気味である。

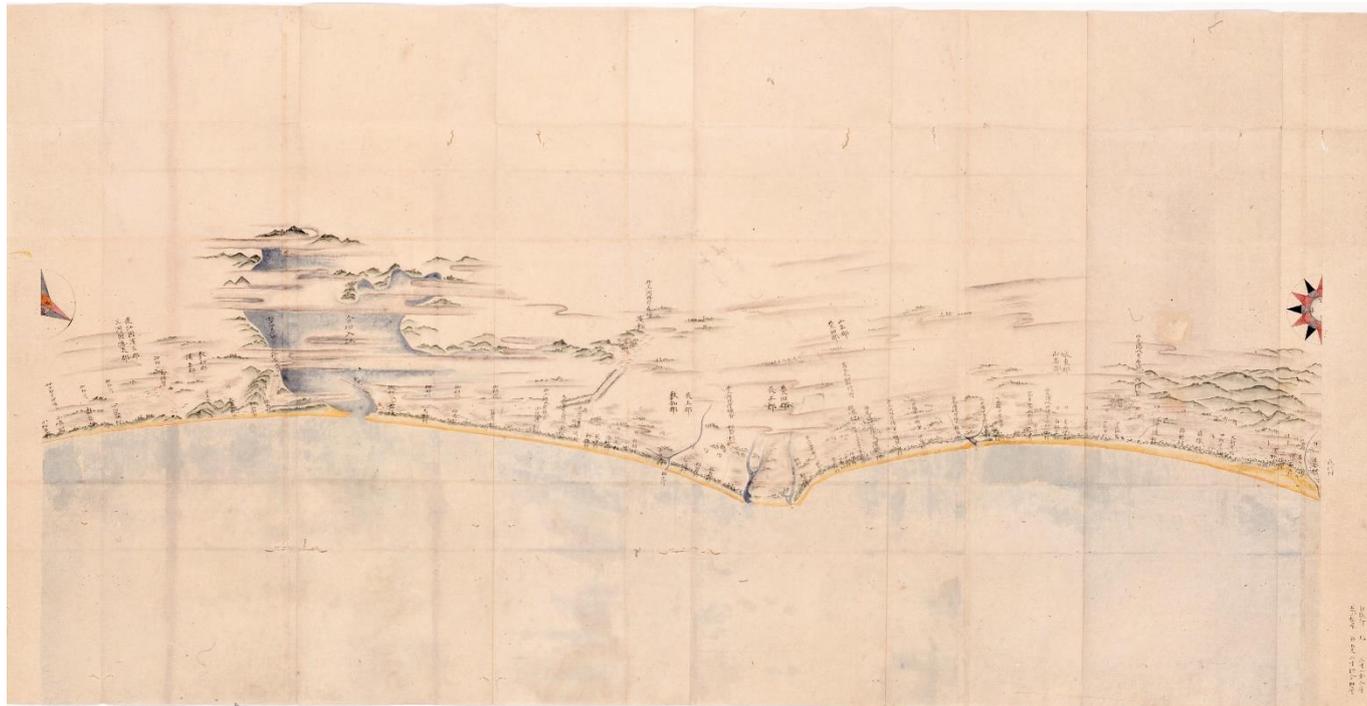


大日本沿海輿地全図第 107 図（駿河・遠江）
国会図書館デジタルコレクション

○ 大図（静岡県：遠州灘）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第七〈自成行／至小松原〉」

国宝：地図・絵図類 番号21、文化元年、縮尺36,000分の1、87×168.5cm



「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第七〈自成行／至小松原〉」 千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

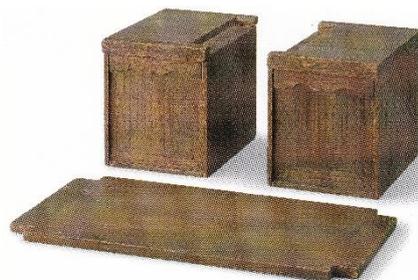
享和3年3月21日に成行村を出立してから28日に小松原村（愛知県豊橋市）に到着するまでの第四次測量の成果である。大図の外に「自成行 北二寸一分三厘 至小松原 西五尺二寸四分四厘」と墨書され、大図の測線の末端同士などの位置関係が記録されている。

遠州灘の単調な海岸線の測線とそこから浜松城下などに向って測線が延びているだけで、東海道は描かれていない。浜名湖測量は第五次測量時のことであるから、浜名湖一帯は大和絵風の「すやり霞」で処理されている。この大図では未測量のため、気賀街道の大図では第六次測量のみの測線ということで、今回は2鋪も展示されながら浜名湖は描かれていない。なお、「東海道歴紀州中国到越前沿海図 上」のレプリカも常設展示されているが、これは第五次測量のみの測線で東海道と浜名湖が描かれている。今回の展示は、第四次測量のみ、第五次測量のみ、第六次測量のみを描いた3図を較べてみる事が出来る希有の機会である。

○ 組立机

国宝：器具類 番号55 縦32.7cm、横96.7cm、高さ25.8cm

木製の組立机で、右袖には引出しが3段あり、左袖は棚が2段で、左右ともに慳貪蓋が付いている。天板、左右の袖の部分の3箇に分解できるので持運びが容易である。



↑ 千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵 →

○ 宿泊木札

国宝：器具類 番号56 縦60.4、横11.8、厚1.6cm

宿泊施設に掲げた看板。両面に「伊能勘解由泊」と墨書されている。



○ 大図（佐渡）

「佐渡国沿海全図」

国宝：地図・絵図類 番号89、文化元年、縮尺36,000分の1、174.8×110.9Cm

享和3年8月19日から25日まで、出雲崎で「渡海風なし。逗留。」を続けた後、8月26日に小木湊（)に上陸してから平山郡蔵と手分けして佐渡測量を終え、9月17日に小木湊を出帆して寺泊に帰着するまでの成果の大図である。

9月2日には佐渡奉行所に測量御用のために佐渡渡海の届けをしたところ、取次広間役の平野仁左衛門は蝦夷地測量の折りにビロオ（広尾）で対面したことがあった。3日は「銀山一覽」ですごし、翌4日から手分け測量が始まった。

大図の上端には小木湊（)と相川など主要港（)との位置関係が次のように記録されている。

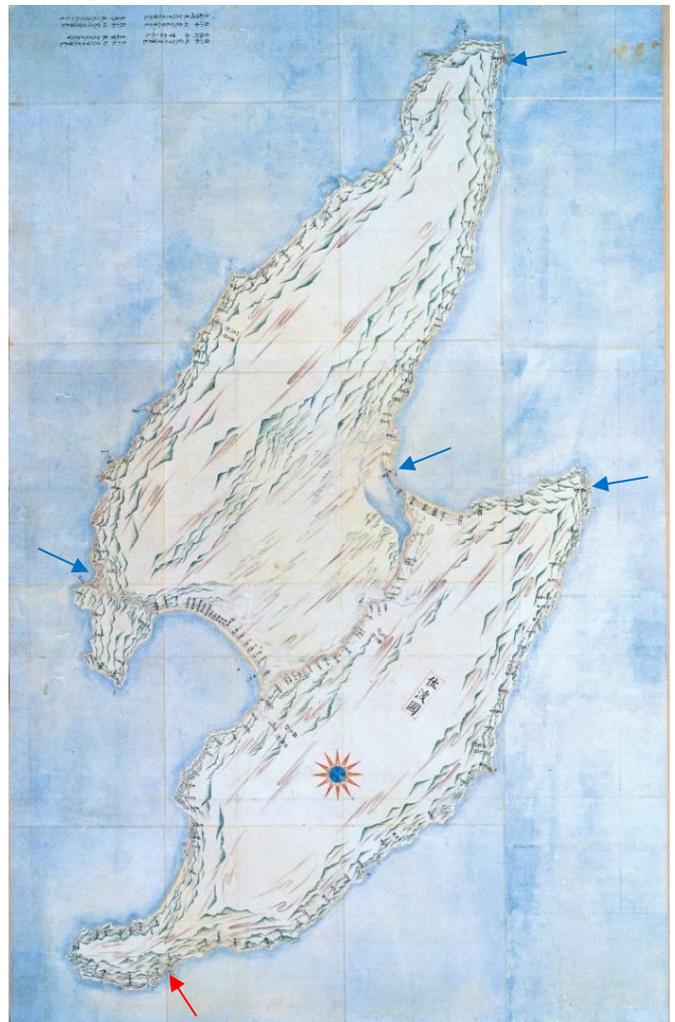
「自小木 北二尺二寸七分六厘七毛 至相川 西四寸二分〇九毛」

「自小木 北二尺六寸五分六厘五毛 至水津 東二尺三寸五分六厘」

「自小木 北五尺一寸九分八厘二毛 至鷺崎 東一尺九寸一分七厘三毛」

「自小木 北二尺七寸七分一厘五毛 至夷丁（夷町） 東一尺二寸七分〇七毛」

なお、右側の全体図は伊能忠敬記念館HPの「資料画像提供」の公開画像、左側の相川と小木湊の拡大図は展示室内の照明で撮影した画像であるため、同じ『佐渡国沿海全図』でありながら色調が異なる。



→
← 千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵
←

この大図は令和2年度の保存修理事業を終えて今回公開された。以前は東側を上にも軸装されていた。記念館HPによると、装丁を解体し、膠による剥落止め、汚れ・しみ・付着物の部分的除去、作図当初の裏打ち以外の裏打紙の除去、欠損部補紙、新規裏打ち、折れ伏せなどの修理をし、表装裂地、軸首を新調して本紙の北を上にして掛幅装に仕立てた。

今回の展示では、国宝指定後に寄贈されたために国宝とはなっていないが、同等の価値を持つ下図と書状が展示されている。

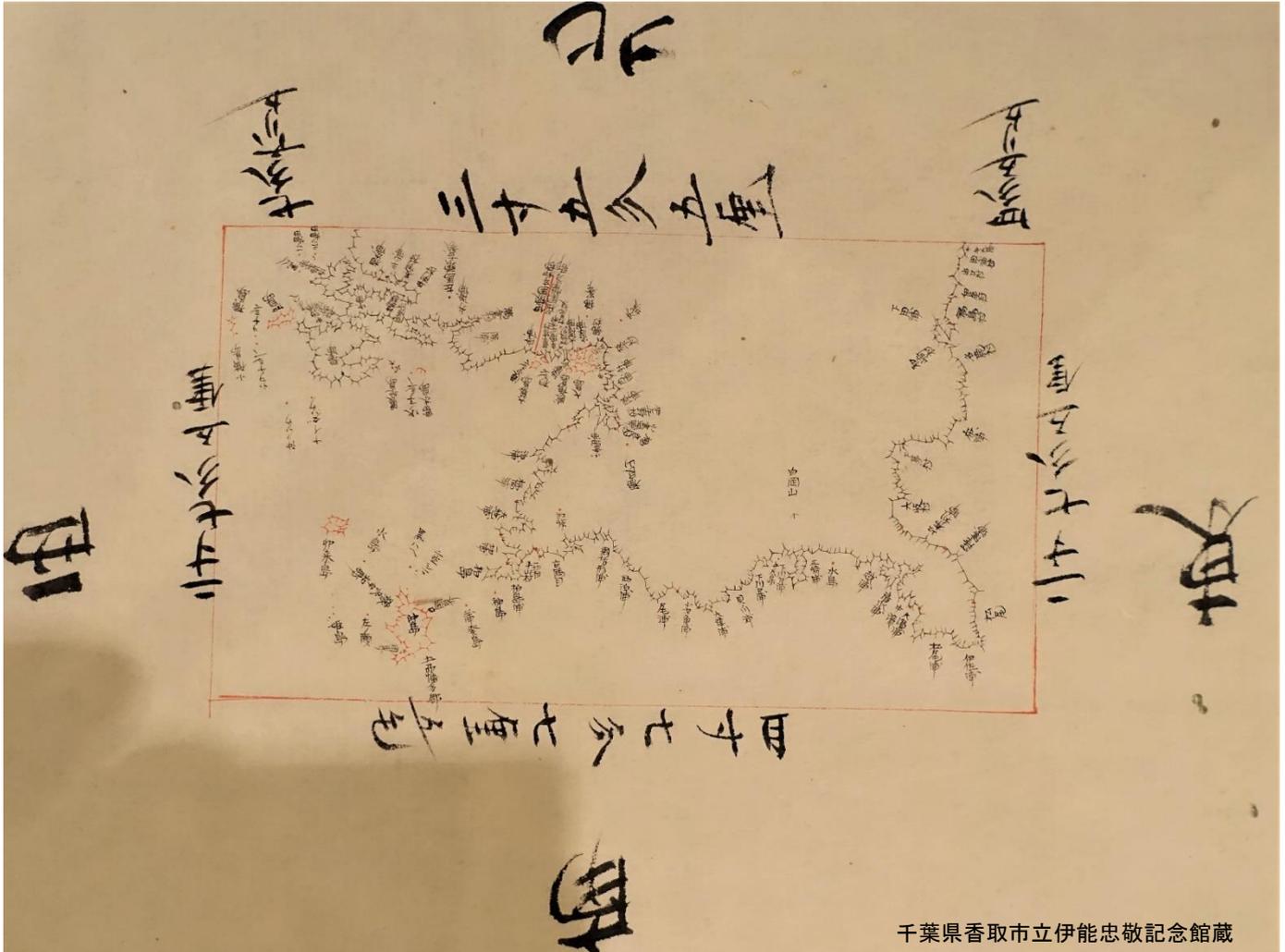
展示室内での撮影のため撮影者の影が写り込んでいる。ご寛恕を願う。

○ 『下図 四国四十四番』（宿毛）

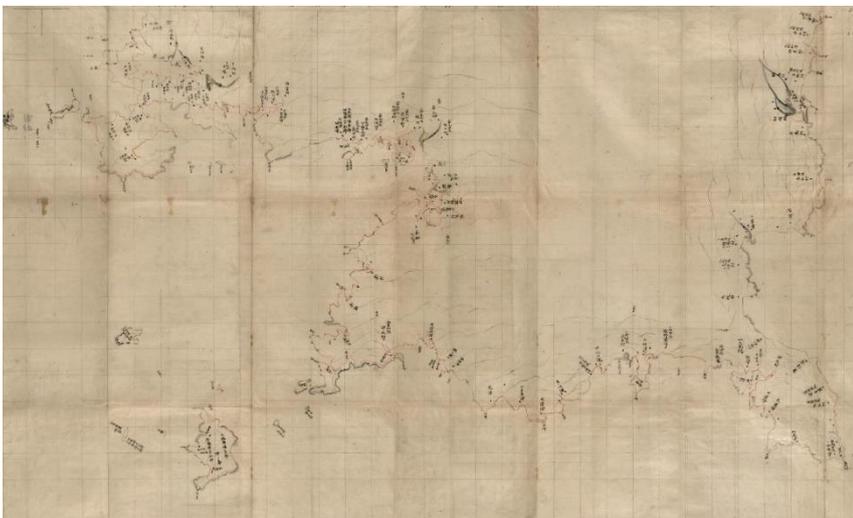
縮尺 432,000 分の 1、及川家旧蔵

大図第 161 号（宿毛）の範囲を小図に縮小した下図である。裏面に「四国四十四番」と記載されている。図郭は朱線、四国本土の測線は墨書で、島の測線は朱書で引かれ、山、峠、小島、測線の所々に朱点が打たれている。足摺岬の付根の土佐清水の横切り測線の測線は省略されている。

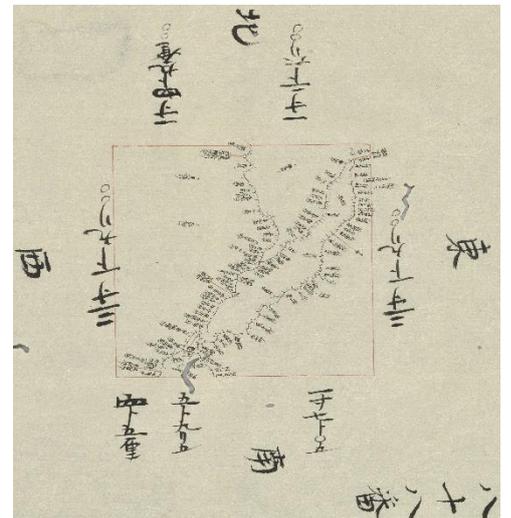
東京大学総合図書館所蔵の『測地原稿図』のうち小図の下図群には、大図の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図していること、図郭が朱線であること、交会線がないことなど及川家旧蔵の下図 4 点と共通するものが多い。『測地原稿図』には『中国第〇〇番』『九州第△△』などがあるが、四国のものはない。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵



アメリカ大図第 161 号（宿毛）



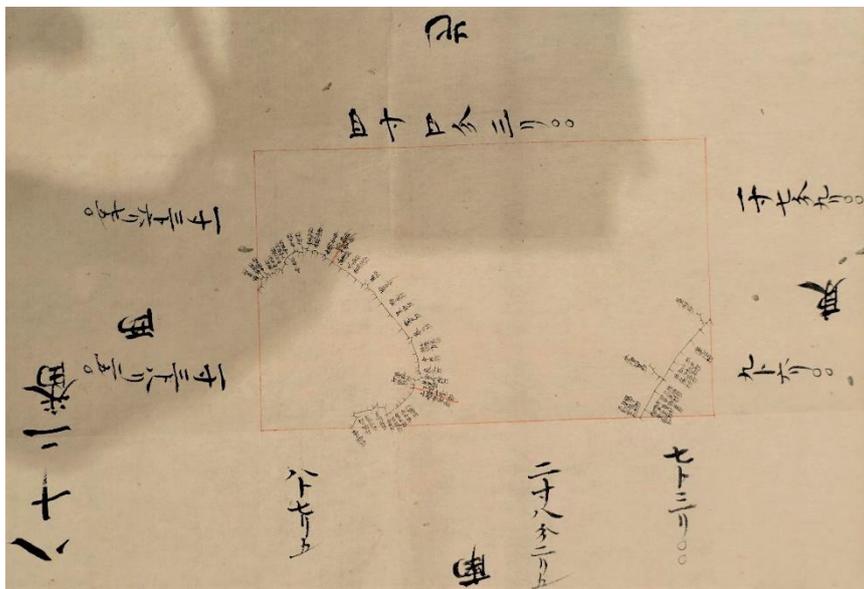
測地原稿図 69 「88 番(善光寺)」

○『下図 八十二番』（下総）

縮尺 432,000 分の 1、及川家旧蔵

伊能忠敬記念館の文化元年上呈の大图とは図割が異なり、最終上呈版の大图第 89 号（船橋）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。

表面に「八十二番」と大書し、図郭は朱書、測線は墨書、郡界に朱線が引かれている。交会線はない。図郭と測線の端末間、測線の端末間の図上の寸法が、南側では「八分七厘五」「二寸八分二厘五」「七分三厘〇〇」と墨書され、合計値は図郭北側の「四寸四分三厘〇〇」と一致する。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

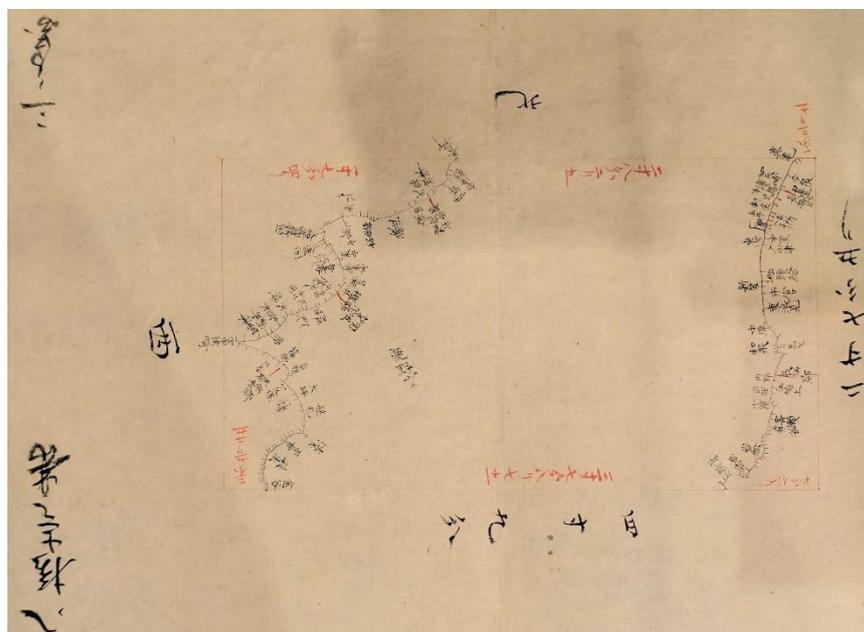
○『下図 八拾壹番』（上総）、

縮尺 432,000 分の 1、及川家旧蔵

最終上呈版の大图第 91 号（木更津）範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。

表面に「八拾壹番」と大書し、「三分図」と注記している。三分図とは長さ一里を三分に縮小した縮尺四十三万二千分の一の小図を意味する。図郭は朱書、測線は墨書、郡界に朱線が引かれている。交会線はない。図郭の東西方向、南北方向の寸法が墨書され、その内訳の寸法が朱書されている。

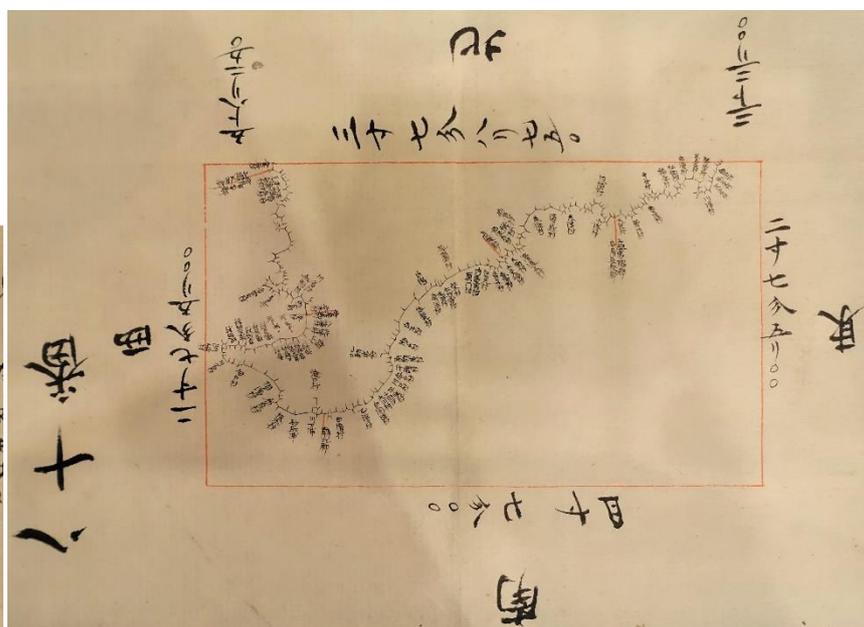
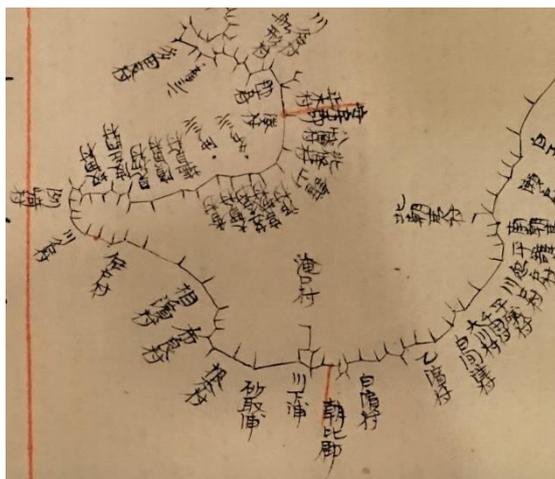
『下図 八拾壹番』と『下図 八十二番』『下図 八十番』とは細部の形式や字体が異なる。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○『下図 八十番』（安房）

最終上呈版の第 92 号（館山）の範囲を縮尺 432,000 分の 1 の小図に縮図した下図である。表面に「八十番」と大書し、図郭は朱書、測線は墨書、郡界に朱線が引かれている。交会線はない。図郭と測線の端末間、測線の端末間の図上の寸法が墨書されている。下は南端部を拡大したものである。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 『下図』（東伊豆町稲取）

縮尺 36,000 分の 1 の小区域下図

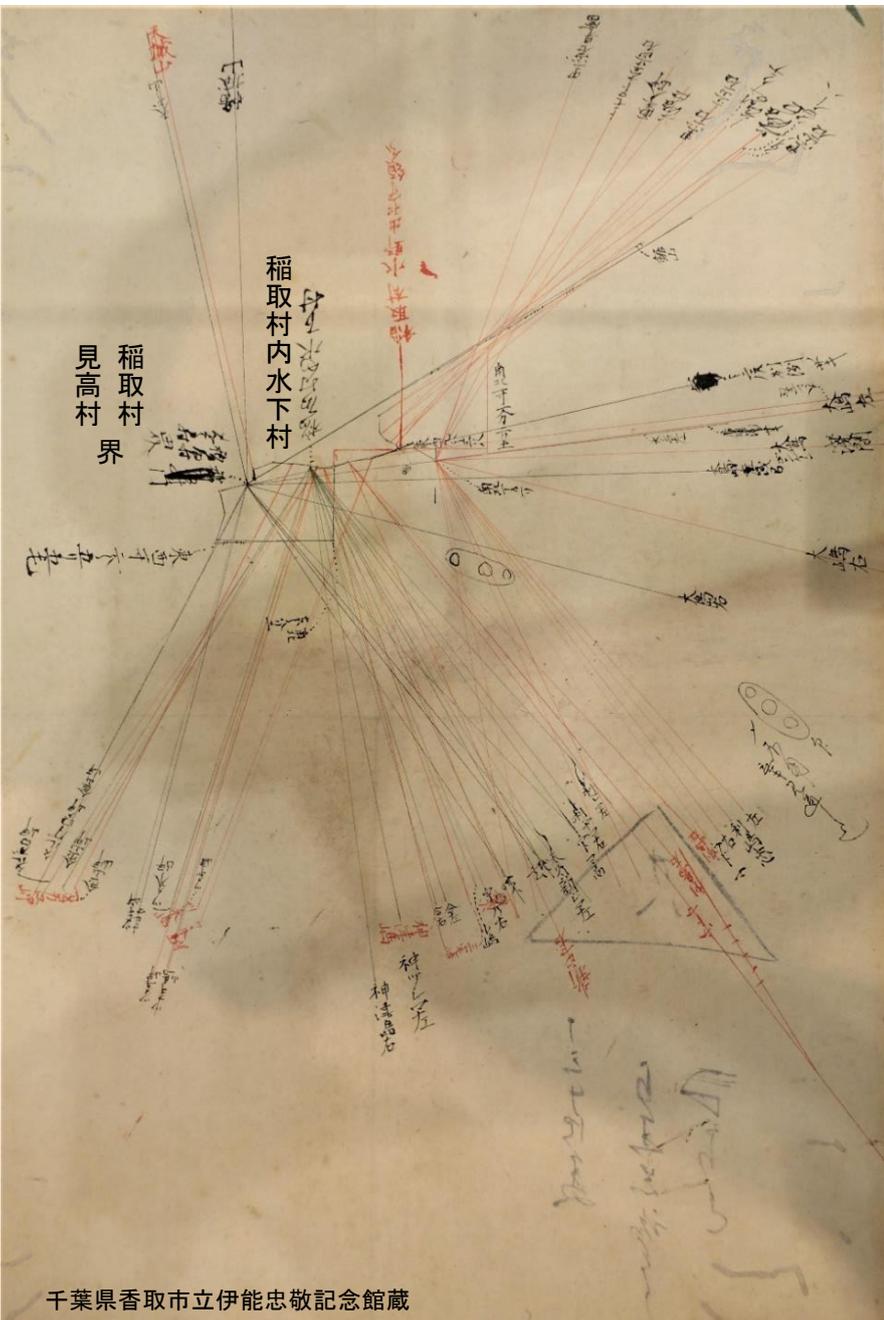
藤岡家旧蔵。藤岡家による伊能図等の寄贈については会報第 26 号、第 61 号で紹介されている。

測線は見高村と稲取村の境界や水下村をへて稲取岬方面に向かって墨書されている。短い範囲であるが各所から北方の天城山、東方の大島、南東方の利島、新島、南方の神津島、爪木崎への交会線が引かれている。交会線は観測地点によって墨書もあれば朱書もある。「稲取村水野出羽守領分」と領主を朱書している。微妙ではあるが縦と横に白径が引かれている。

裏面の△の中に「廿八」が確認できる。『伊能忠敬関係資料目録：下図』（伊能忠敬記念館）によると、国宝地図・絵図類 188 番『自相模国足柄下郡根府川村至伊豆国賀茂郡熱海村下図』（△十七）など伊豆半島東海岸の小区域下図 10 点がほぼ同様の形式で作製されている。この藤岡家旧蔵の下図は、国宝地図・絵図類 194 番『自伊豆国賀茂郡大川村至伊豆国賀茂郡白田村下図』（△廿七）と 195 番の『自伊豆国賀茂郡見高村至伊豆国賀茂郡白浜村下図』（△廿九）の間に位置するものと考えられる。

裏面の△廿八の下には「十三 十四番 自黒岩より？印迄」と墨書されている。

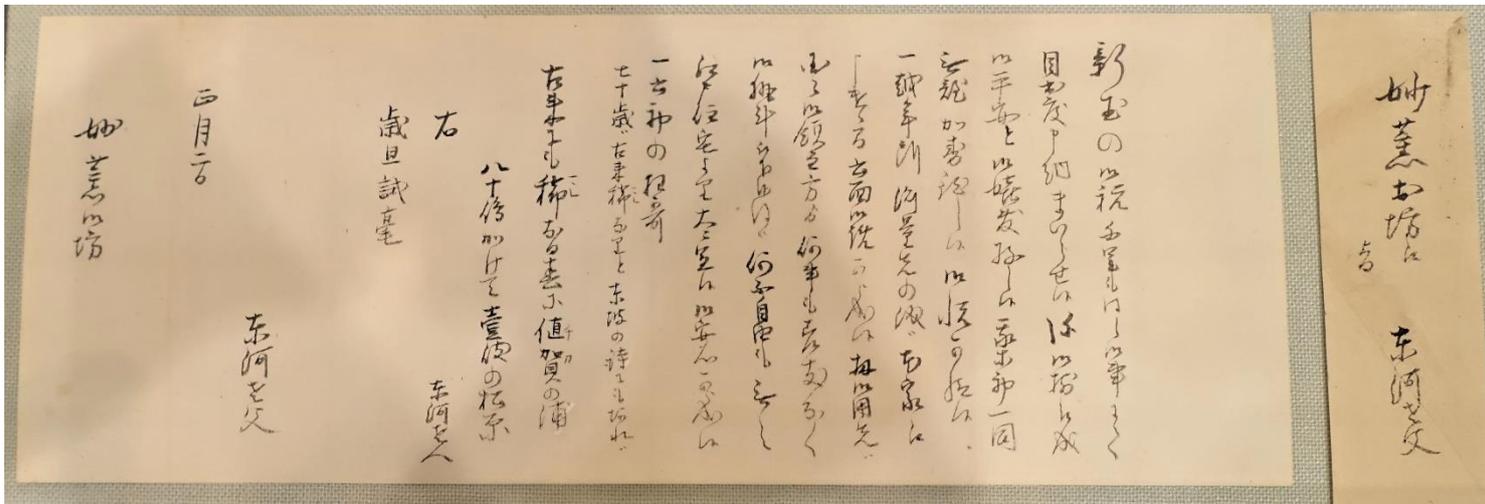
この下図の範囲を測量したのは享和 2 年の第 2 次測量と、文化 1 2 年の第九次測量の二度であり、どちらの測量のものであろうか。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 『書状』（文化 10 年 1 月 2 日付、妙薫あての忠敬書状）

藤岡氏旧蔵。忠敬は第 8 次測量の途中二度目の正月を賤津浦（佐世保市）で迎えた。文化 10 年 1 月 2 日の『測量日記』には「此日江戸書状を平戸へ出」とあり、他の書状と共に平戸藩によって浅草の暦局へ送られ、佐原の長女の妙薫の元へ届いた書状である。会報『伊能忠敬研究』35 号に旧蔵者である藤岡健夫による翻刻や訳文が紹介されているので参考にされたい。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

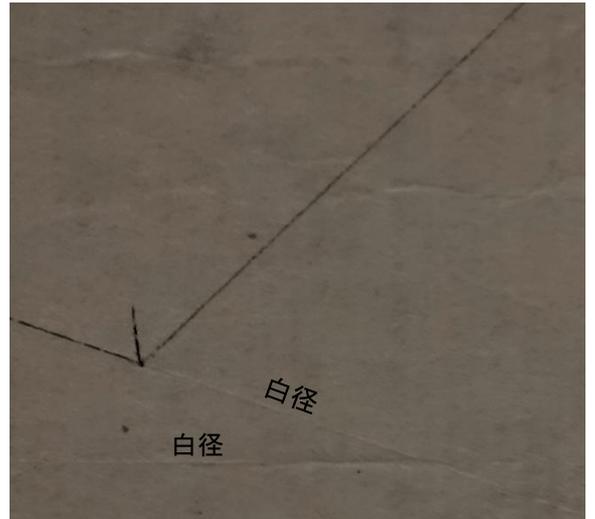
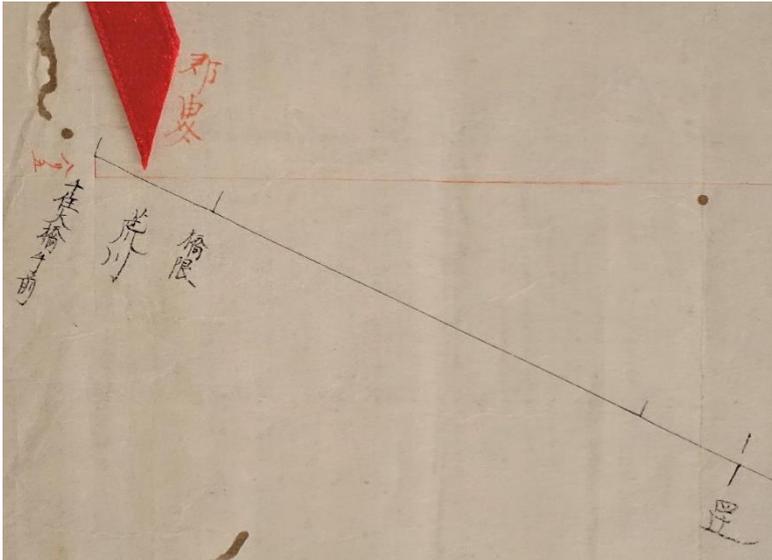
○ 『江戸府内図 下図』（足立区）

「自千住宿至武蔵国足立郡保木間村下図」

国宝：地図・絵図類 番号517、縮尺6,000分の1、24.3×112.6Cm

縮尺6,000分の1という江戸府内図の下図であり、千住大橋から千住宿をへて保木間村までの測線である。江戸府内図は江戸府内測量の結果だけではなく、王子村～川口宿、板橋宿～戸田村、高輪木戸～品川宿のように、江戸府内測量以前に測量済みの範囲も描かれている。千住宿は第1次測量の往路と復路、第2次測量の復路、第3次測量の往路の出発点・帰着点である。特に第2次測量の復路では、千住宿から千住大橋を渡り、浅草厩局、両国橋から黒江町まで測量しており、文化元年上呈の国宝地図絵図類14の『初図歴尾州赴北国到奥州沿海図第一、奥州沿海図第第一、奥州沿海図第一、越後街道第一』にはその測線が描かれている。この下図は享和元年12月7日の測量のデータによるものではないか。

この下図では白径が確認できる。白径はへらなどで引かれた圧迫痕で、右側の図では水平方向の作図の基準線と測線の下書きの延長線が見られる。



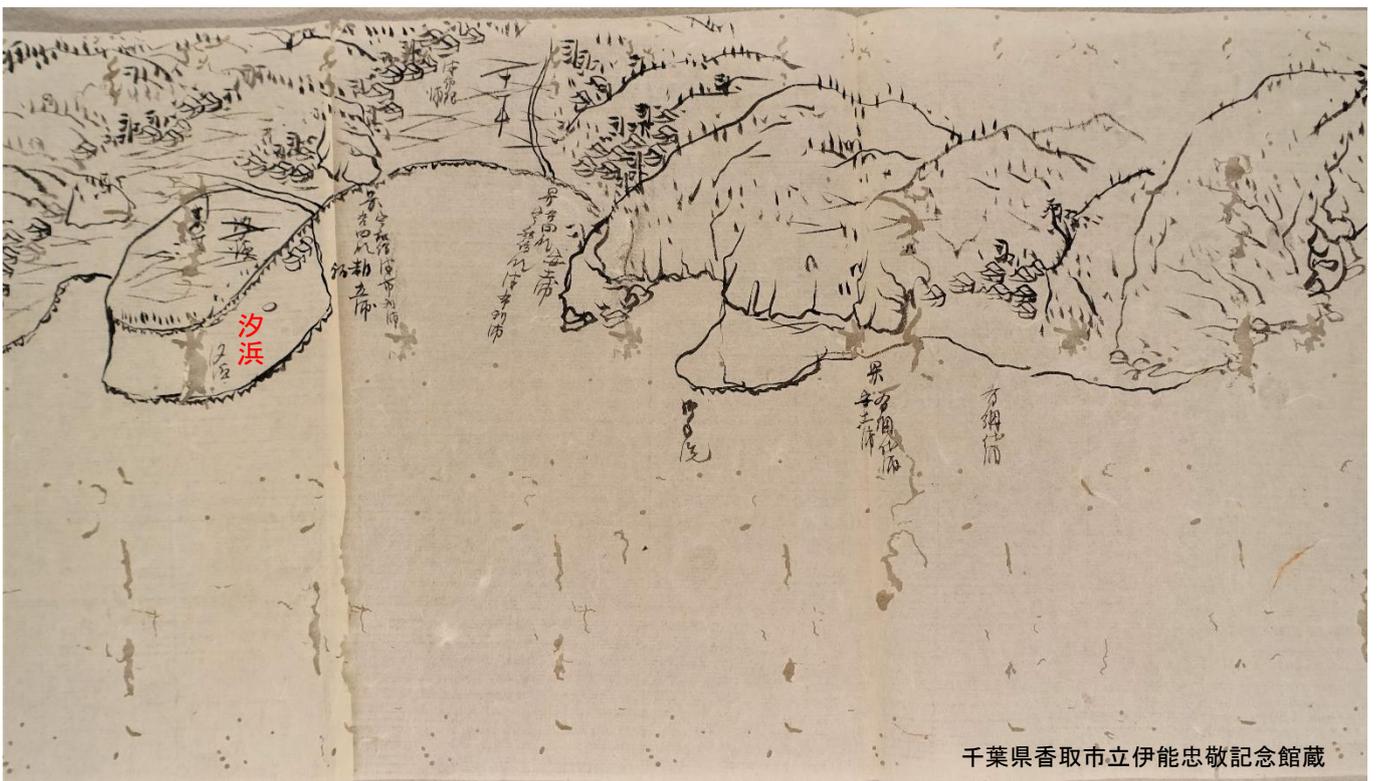
← 千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵 ↑

○ 『麓絵図』（宇和海：愛媛県西予市～八幡浜市）

「自伊予国宇和郡蔵貫浦至伊予国宇和郡上泊浦麓絵図」

国宝：地図・絵図類 番号563

第六次測量中の文化5年7月3日から5日までの測量範囲の麓絵図である。麓絵図は鳥瞰図風の風景画であり、伊能図作成の際に利用された。第6次測量では絵の得意な青木勝次郎が隊員として加わっているためによるものであろう。「汐浜」の文字が見える。塩田であろうか。

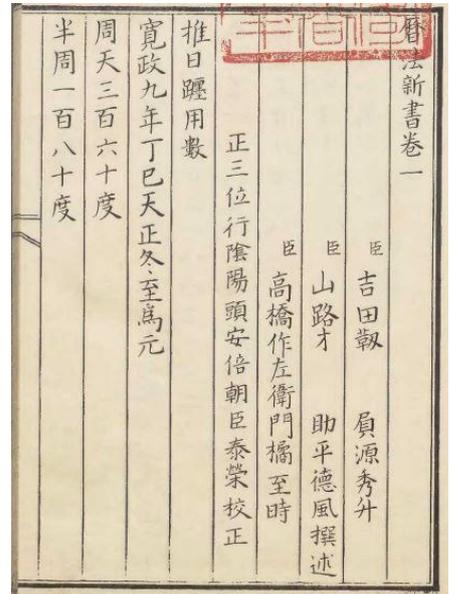
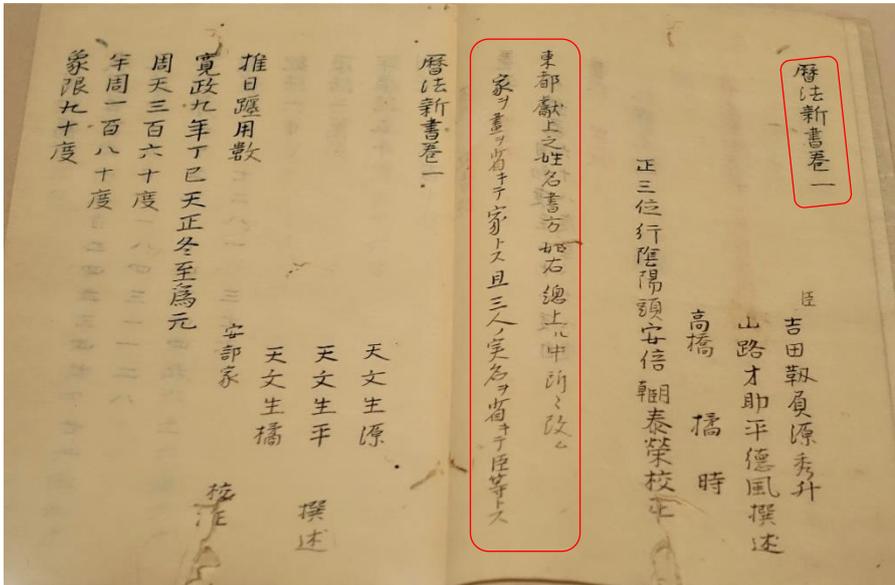


千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 『寛政暦書』 『寛政暦書 坤』 『寛政暦書 乾』

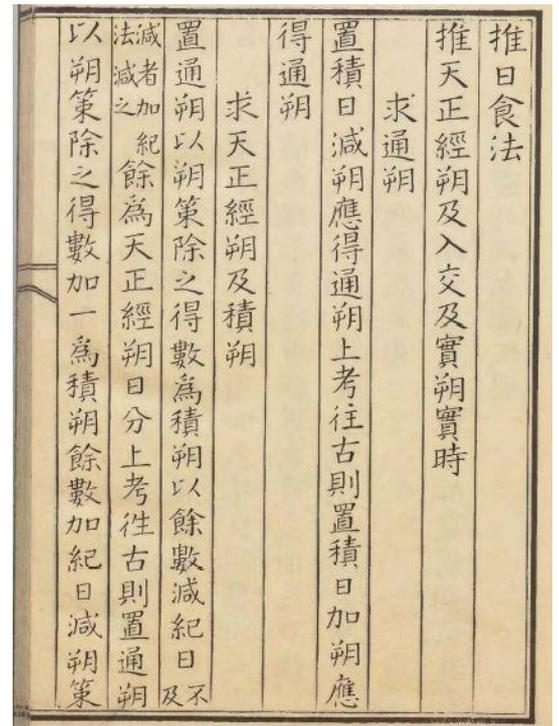
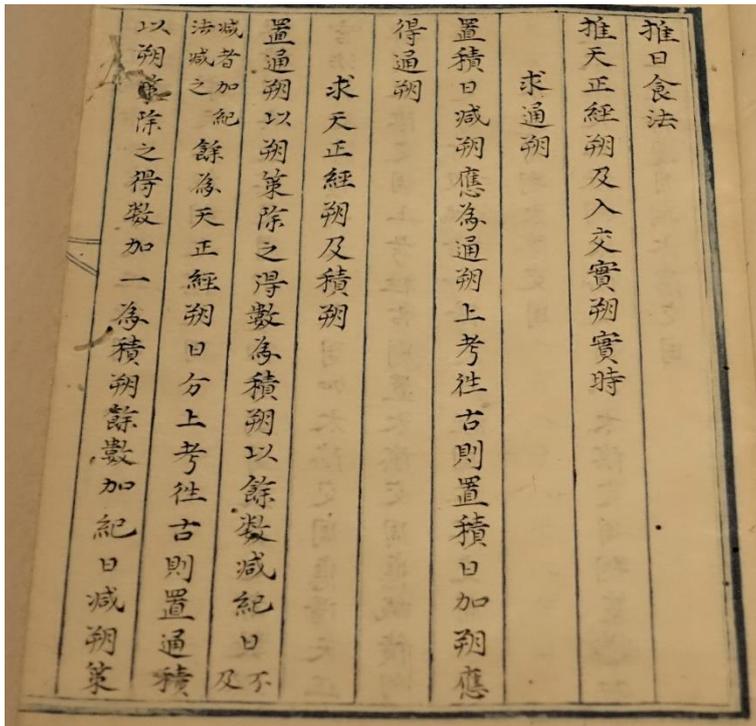
国宝：典籍類 番号28、29、30

寛政の改暦において高橋至時は天文方に抜擢され、前任天文方吉田秀升、山路徳風とともに改暦にあたった。改暦の名目的責任者の土御門家と打合せ、西三条台の改暦所で天体観測に従事し、『暦象考成後編』などに基づいて『暦法新書』を完成させた。『暦法新書』は土御門家から上奏され、寛政9年に改暦宣下、翌10年から寛政暦が施行された。



『寛政暦法』の伊能忠誨が手写した部分が 香取市立伊能忠敬記念館所蔵

『暦法新書』の該当部分 紅葉山文庫旧蔵
国立公文書館デジタルアーカイブ



『寛政暦法』の伊能忠敬が手写した部分が 香取市立伊能忠敬記念館所蔵

紅葉山文庫旧蔵の『暦法新書』の該当部分
国立公文書館デジタルアーカイブ

『暦法新書』八巻は観測結果の二巻、暦算法の六巻、割円八線表の二巻から成る。国宝の資料名は題簽に基づいて『寛政暦法』としたのであろうが、忠誨の手写部分にも記されているように『暦法新書』が書名である。『伊能忠誨日記』の文政5年3月15日に、暦法新書の立成（観測データ部分）を拝借したとある。宝暦暦も『暦法新書』という名称なので、寛政暦の『暦法新書』を区別するためのネーミングであろうか。

忠誨は『暦法新書』を書き写しただけではなく、幕臣が朝廷に献ずる場合の姓名の書き方などについても赤枠内に注記している。また高橋作左衛門至時の名前の一部を闕字としている。

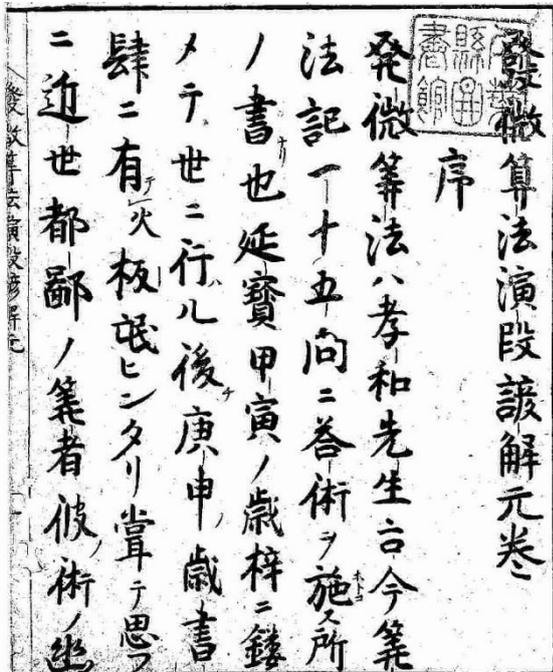
○ 『発微算法演段診解 元卷』 『発微算法演段診解 利卷』 『発微算法演段診解 貞卷』

国宝：典籍類 番号412、413、414

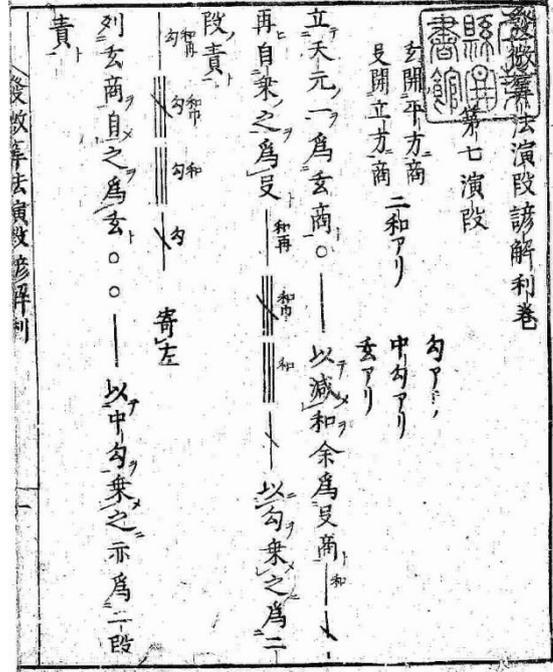
延宝2年(1674)に刊行された関孝和の『発微算法』は、「傍書法」と呼ばれる連立多元高次方程式の解法を考案したものという。『発微算法演段診解』四巻は関の弟子である建部賢弘が貞享2(1685)年に刊行した『発微算法』の解説書である。元巻が関孝和の『発微算法』で、亨・利・貞巻は建部賢弘による解説である。

保柳睦美によると江戸出府以前の蔵書目録にも『発微算法演段診解』三冊とあるので、当初から亨巻だけが欠落していたようである。大谷亮吉『伊能忠敬』では四冊とも現存しないとしている。

次の『発微算法演段診解 元巻』の序文と、『発微算法演段診解 利巻』の第七演段の部分が展示されている。



『発微算法演段診解 元巻』の建部賢弘の序文



『発微算法演段診解 利巻』

千葉県立図書館の「菜の花ライブラリー」の「房総数学文庫」所収

○ 『箋积豊後風土記』

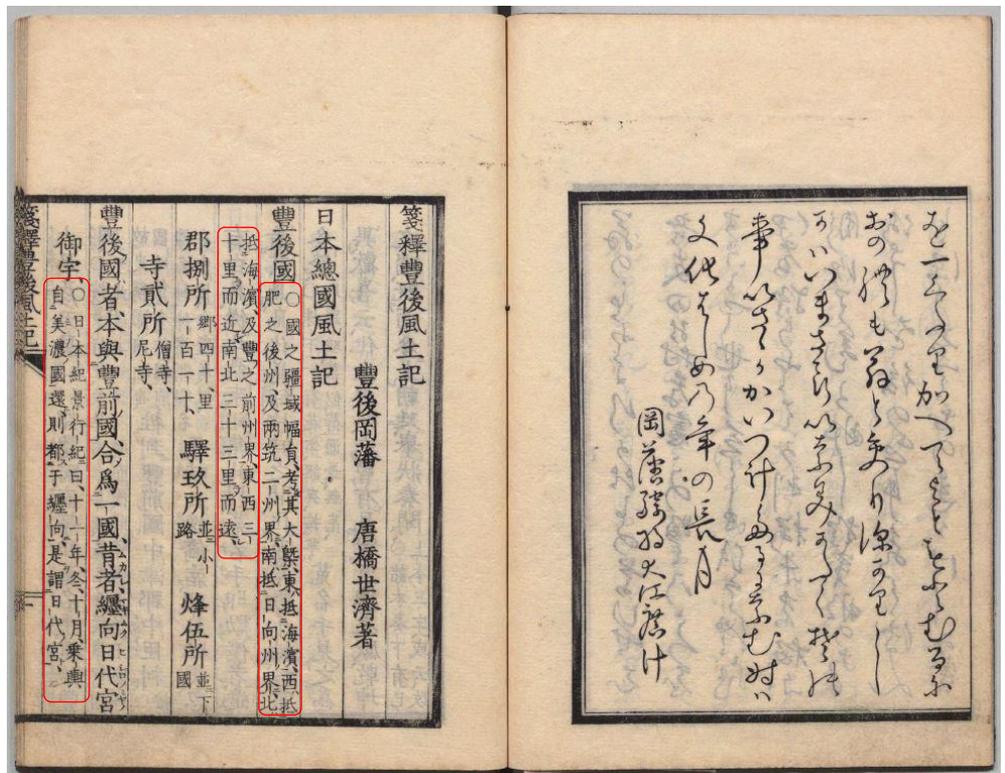
国宝：典籍類 番号401

『箋积豊後風土記』は唐橋君山(世濟)が現存五風土記の一つである『豊後国風土記』について、実地調査に基づいて考証、注釈を加えたもの。赤枠で囲った「○」以下の部分が唐橋による注釈である。

唐橋君山は豊後岡藩(大分県竹田市)の藩医にして儒学者。享和4(1804)年に岡藩が幕府に献納した『豊後国志』を編纂した。

『豊後国志』は漢文で著され儒教臭が強いものの、小藩分立の豊後にあつて、豊後国各地で実地調査を行つて、藩領をこえた豊後一國の地誌を編纂したことは、寛政期以降の地誌編纂時代の先駆けといえる。

国宝の典籍類には伊能忠敬が集めた各地の地誌として、『但馬考』『備陽国志』『芸備国郡志』『能登国誌』『筑後地鑑』『筑後志』が残されている。



箋积豊後風土記(岡藩 由学館旧蔵) 国立公文書館デジタルアーカイブ